儀礼とテキスト

――インド学の視点から――

森　　雅秀
〈金沢大学〉

0.　宗教儀礼とテキストの関係について、インド学の視点から簡単な紹介を行いたい。もとより、壮大なインドの儀礼世界を限られた字数にまとめることは、ほとんど不可能に近い。遺漏多きことを危惧しつつ、点描風に示そう。あつかう対象も、ヴェーダの宗教と仏教が中心で、イスラム教やジャイナ教などにはおよんでいない。

1　ヴェーダ文献

1.1　数あるインドの宗教文献の中で、ヴェーダはその最古にして最重要の文献として、現代にいたるまで絶対的な権威を持ち続けている。聖典と呼ばれたり、梵我一如の思想が強調されることから、ヴェーダは哲学的、神秘的な書としてとらえられることも多いが、基本的には祭式すなわち儀礼を主題とする文献である。サンヒター（本集）と呼ばれる部分を中心に、膨大なテキストから構成される文献群であることにも注意しなければならない。

ヴェーダの文献群は、祭式を行う祭官の種類にしたがって、リグヴェーダ、サーマヴェーダ、ヤジュルヴェーダ、アタルヴァヴェーダの四種に分かれる。それぞれがサンヒター、ブラーフマナ（梵書）、アーラヌヤカ（森林書）、ウパニシャッド（奥義書）の四部門を持つ。このうち、ヤジュルヴェーダのみは、成立段階の異なる白ヤジュルと黒ヤジュルの大きな二つのグループにさらに分かれ、それぞれがサンヒター以下を持つ。

サンヒターは祭式において祭官によって唱えられるマントラ、すなわち神々への讃歌や呪句である。祭式の中の「せりふ」に相当する。神々の偉業をたたえるため、しばしば神話的な要素を含むが、一貫したストーリー性には乏しい。次のブラーフマナはサンヒターに対する散文の解説で、儀礼の方法に相当するヴィディ（儀軌）と、儀礼の意味の解説であるアルタヴァーダ（釈義）の二つに大別される。いずれも「ト書き」に当たるが、後者には神学的な説明や神話伝承が含まれ、儀礼の持つ意味や機能、あるいは起源が明瞭にされる。なお、ヤジュルヴェーダの黒ヤジュルのみは、マントラに散文部分（ブラーフマナ）をあわせてサンヒターと呼ぶ。

1.2　アーラヌヤカからウパニシャッドにいたると、祭式についての神秘主義的教義や哲学的思弁が中心的な主題となり、祭式の実際から距離を置くようになる。

しかし、それを補うように、ヴェーダの補助学として、儀礼に関するさまざまな知識が体系化される。のちにヴェーダーンガ（ヴェーダの支分）と呼ばれる六分野、すなわちシクシャー（音声学）、カルパ・スートラ（祭式の規程）、ヴィヤーカラナ（文法学）、ニルクタ（語源学）、チャンダス（韻律学）、ジオーティシャ（天文学）が成立する。カルパスートラは、王権儀礼などの大規模な祭式をあつかうシュラウタスートラと、家庭内祭式を中心とするグリヒヤスートラ、そして、ヴェーダを伝えたアーリア人の生活規範を定めたダルマスートラ、祭場の設営のための測量法をあつかうシュルバスートラで構成され、より具体的な祭式の方法

が、この部門で複雑かつ精緻に展開していく。このうち、シュラウタスートラの成立が最も早く、グリヒヤスートラがこれに続く。カルパスートラの内容は、後世のヒンドゥー社会の宗教的側面を形成することになる。

1.3　ヴェーダ文献の大まかな成立段階を、ブラーフマナにまでしぼって示すと、次のようになる（井狩 1989）。

リグヴェーダ――サーマヴェーダ、アタルヴァヴェーダ、ヤジュルヴェーダのマントラ部分――ヤジュルヴェーダの散文部分（祭式解説部分）――各ヴェーダのブラーフマナ

はじめのリグヴェーダのサンヒターは、第 9 巻までと、第10巻のふたつの層に大きく分かれ、さらに、第 9 巻までも段階的に成立したことが明らかにされている。ただし、いずれもサンヒターの讃歌のみからは、いかなる儀礼が行われていたかは明瞭にはなしえない。それ以降の大きな変化は、ヤジュルヴェーダの散文部分の登場に認められる。リグヴェーダをはじめとするそれまでの讃歌の内容は、神々への直接的な祈願が中心であったのに対し、ヤジュルヴェーダの散文部分は、祭式に対する絶対視が優勢となる。

本来、ヴェーダ祭式は神々が人々にもたらす恩恵を願い、供犠を捧げる単純なものであった。そこでは、祭式は神々との交流を可能とする手段でしかない。また、神々への呼びかけの言葉は、祭官が一種の興奮状態で歌うものであった。讃歌が神々に対して効力を持つのは、それが「新しい歌」であることが重要であった。テキストは儀礼のたびに刷新されたのである（藤井 2007）。

しかし、ヤジュルヴェーダの散文部分、そしてそれに続くブラーフマナ文献では、このようなストレートな神々への讃歌ではなく、儀礼を構成するさまざまな要素の定義付けという性格が顕著となっている。儀礼を構成する要素とは、祭式の空間構造、道具とその配置、儀礼の手順、所作とマントラ、そして神々と祭官、祭主などである。儀礼の言葉を正確に発声することによって、これらに対する定義付けが現実のものとなるのである。そこではリグヴェーダに見られた言葉の斬新性は求められない。むしろ正確な反復が重要であった。

このように、ヴェーダ祭式の新しい段階になると、神々でさえも祭式の一要素となり、人々は祭式の力によって神々もコントロールできると考えるようになった。それとともに、祭式の空間や構造が宇宙に等置され、一方、祭官や祭主の身体もこれに重ねられることで、祭式を通して、大宇宙と小宇宙との相同性が意識されるようになる。こうして、後世のウパニシャッド哲学への基本的な思考形式が成立する。

1.4　これらの儀礼要素に対する定義づけは、多くの場合、「等置」という形式をとる。「（儀礼の構成要素である）Aは（宇宙の神秘的な力や秩序である）Bである」と、AとBが本質的には同じであることを、儀式の中の言葉によって示すのである。このような定義付けは、儀礼の説明をするための副次的なものではなく、儀礼の中で語られる言葉そのものであることに注意が必要である。儀礼を説明するための一種のメタ・テキストが、儀礼を構成するテキストそのものの位置を占めているからである。

このような祭式の中での言葉の変化と、それにともなう祭式観そのものの変化は、リグヴェーダの讃歌を唱えるホートリ祭官から、ヤジュルヴェーダに属するアドヴァルユ祭官へと、儀礼の中での主役が移っていったことを反映している。アドヴァルユ祭官たちの有していた独特の祭式観が、神々に対するそれまでの単純な献供儀礼を、宇宙論的な意味を持つ壮大な象徴体系へと変容させたのである。それが儀礼のテキストに明瞭に示されている。

ヤジュルヴェーダの散文部分やブラーフマナ文献では、祭式の持つ絶対性は、祭式が必ず効果をもたらすという形で、くりかえし強調される。神々の力ではなく、祭式の力によってである。それは多くの場合、すでにあげた「AはBである」という等置の表現に連続して表れる。「ある儀礼Xを行う。（Xの構成要素である）AはBである。（Bによってもたらされる効果）Yが起こる」という形式である。その中に「AはBで

ある」ことの理由が加えられたり、それに関わる神話が言及されることもある（永ノ尾 1989）。

儀礼は効果をもたらす何らかの力を備えていることが、強く意識されて、その中で等置の理論が用いられている。このような力を定義づけるのも、儀礼の中の言葉であり、それをまとめたテキストである。テキストが儀礼の力を保証しているのである。

２　儀礼と神話

2.1　ヴェーダ文献は祭式文献であると述べたが、そこには数多くの神話も含まれる。神話は単に神々の偉大さや偉業を伝えるだけではなく、しばしば儀礼と結びつけられる。

たとえば、有名なウルヴァーシーとプルーラヴァスの物語は、ガンダルヴァの娘であるウルヴァーシーと、地上の王プルーラヴァスとの恋愛譚であるが、これを伝えるブラーフマナ文献では、この物語から祭火の起源が導き出される。そして、実際の儀礼において、火を生み出すためにこすりあわされるふたつの樹木を、ウルヴァーシーとプルーラヴァスとそれぞれ見なし、生まれた火を二人のあいだの子であるアーユスと呼んでいる。

神話は儀礼の起源を伝えるだけではなく、儀礼の構成要素の等置の根拠となり、さらに、儀礼は神話世界の地上における再現の役割を果たしている。

2.2　ヒンドゥー教の儀礼として最も一般的なのは、おそらくプージャーであろう。プージャーはヴェーダ祭式に起源を持たず、アーリア人たちが行っていた賓客接待儀礼と、非アーリア的な供物奉献儀礼から形成されたと推測されるが、ヒンドゥー教の寺院や家庭内で、神々に対する礼拝方法として、現代においても広く行われている。

プージャーの整備された形は16のプロセスからなる16ウパチャーラプージャーであるが、この16のプロセスに、リグヴェーダ第10巻の有名な「原人讃歌」（プルシャスークタ）が結びつけられている。世界創造神話のひとつである原人讃歌は16の偈頌によって構成されるが、この16偈がプージャーの16のプロセスに対応し、それぞれのプロセスが終わるたびに、該当する讃歌を唱える（Tachikawa 1983）。

原人讃歌の成立した時代には、もちろん16ウパチャーラプージャーは行われていなかったはずである。原人讃歌が儀礼の起源であったり、その内容を現実の世界で実現させるために儀礼が行われていたわけではない。ヒンドゥー儀礼としてプージャーを整備していく過程で、有名な原人讃歌と関連づけられたのであろう。ヴェーダの祭式とは異なる方法で、神話が儀礼と結びついているのである。

2.3　ヒンドゥー教の聖典であるブラーナ文献にも、儀礼に関する記述が多く含まれる。そこでは、ヴェーダ文献のように、神話と結びつけられて儀礼が語られることもあるし、あるいは、儀礼の根拠として神話が示されることもあるが、神話と儀礼をそれぞれ別個にあつかい、とくに儀礼に関する記述は、手順や方法を定めたマニュアルに徹していることが多い。ブラーナ本文は神話を説き、それに関わる儀礼は儀軌、讃歌、瞑想法などの補助的な文献として、別に準備されることも多い。これは、後で紹介する密教の儀礼文献のあり方にも似ている。

３　ミーマーンサー学派

3.1　インド哲学における正統的なグループは六派哲学の名で知られているが、その中でもっとも儀礼と関係が深いのはミーマーンサー学派（祭事学派）である。この学派にとってヴェーダ聖典は絶対的な存在にして誤りなきものであり、そこに説かれる祭式の重要性は、神々をも含むすべてを凌駕している。上述のヤジュルヴェーダの散文部分、そしてブラーフマナ文献に見られる祭式観を直接受け継いでいるのである。

ミーマーンサー学派の祭式観のもっとも顕著な特徴は、そこに特定の力を認める点であろう。これは「新得力」(アプールヴァ) と呼ばれる。ブラーフマナ文献に見られたように、ヴェーダの祭式は何らかの効果 (果報) をもたらすことが、つねに期待された。しかし、このような効果は、祭式の執行の後、ただちに現れるとは限らない。そのため、祭式と果報をつなぐものとして、そこに特定の力が存在すると考え、これを新得力と呼んだのである。

このような力の存在を認めたため、それに矛盾する文献に対しても、何らかの説明が求められることになる。たとえば、儀礼を定めるヴェーダ文献の中には、このような果報を明記しないものもある。その場合、力が効果を持つことが認められなくなる。ミーマーンサー学派では、このような場合でも、すべての人に共通する望ましい効果である「天界に生まれること」が想定されると考えた。これを「ヴィシュヴァジットの法則」と呼ぶ。

一方、儀礼の規程に相当する儀軌の中に果報が明記されず、儀礼の意味の説明である釈義に示されていることがある。このような場合には、釈義の果報を儀礼の果報と見なすという法則も立てられた。これを「ラートリサットラの法則」と呼ぶ。

時代が下ると、儀礼を規定する儀軌の文章そのものにも力を認めるようになる。これは「生成力」(バーヴァナー) と呼ばれ、動詞の願望法の語尾にそなわっていると考えられた。ここから、儀礼の文章を対象とする煩瑣な議論がはじまり、ミーマーンサー学派の内部にいくつかの学派を生むことになる。その詳細にはふれないが、儀礼のテキストとそれが持つ力が、この学派の中心的な主題となっていくことが重要である。

3.2 これらの議論の前提として、ミーマーンサー学派は、祭式文献を統一的に分類し、体系づけた。ブラーフマナ文献に対して伝統的に行われた儀軌と釈義の二分類に、神々への讃歌や呪句である「マントラ」、祭式の名称を示す文章である「祭名」、特定の行為の禁止を命じる「禁令」を加えた五種類に分類した。分類の対象となったのはブラーフマナだけではなく、ヴェーダのサンヒターも含む。

そして、このような分類をベースに、儀礼を構成するさまざまな要素の主従関係を、ミーマーンサー学派は定めていった。儀礼が行為や設備、道具、供物など、種々の要素からなるという考えは、インドの儀礼世界で特別なことではないが、ミーマーンサー学派は、これらの諸要素を述べた文章の解釈から、各要素間の関係を示そうとした点に特徴がある (以上、ミーマーンサー学派については、主に黒田 1989 に依拠している)。

4 仏　教

4.1 パーリ三蔵を中心とする初期仏教の文献に、儀礼を主題にした独立の文献は存在しない。そもそも、初期の仏教僧団が儀礼を積極的に実践することも、おそらくなかったであろう。サンガに入るための受戒の式や、戒律に違反した場合の所定の処置と贖罪のたぐいはあったが、いずれも儀礼というよりも、形式に則った手続きと呼んだ方がふさわしい。その条文も戒律の一部に組み込まれているにすぎず、儀軌のような独立した文献ではなかった。

4.2 初期の仏教のテキストで、儀礼や儀式と関わりのあるものとしては、むしろ呪文や呪句をあげるべきであろう。中でも重要なものは「パリッタ」と呼ばれる呪文である。災いや疫病を取り除いたり、吉祥や富をもたらすための呪文として、仏典には数多くのパリッタが登場する。これらの多くは仏教の形而上学的なレベルの教えとは無関係の、当時のインドの人々の民間信仰と結び付いたものであった。仏陀自身はこのような呪術行為を容認していなかったが、仏典にはパリッタを唱える比丘や比丘尼の姿も記述されている。パリッタは上座部仏教で引き継がれ、スリランカやタイの仏教では、現代でもその伝統が生きている。

パリッタと並んでよく知られた呪文に「真実語」(Pali, saccavacana; Skt. satyavacana) がある。その名のと

おり「真実を語る言葉」という意味で、さまざまなものが仏典に現れる。

真実語についてパーリ仏典から大乗経典まで広く渉猟した奈良（1973）によれば、初期の真実語は、このような呪力に対する素朴な信仰が中心であったが、次第にそれを唱えるものの特別性、具体的には仏やそれに準ずるもの（釈迦の前生など）が真実語を唱えることに重点が移る。さらにそれが悟りを得るための「誓願」という形に変わり、最終的には、その誓願が「加持力」を持つと考えられるにいたる。大乗経典には「真実の加持」という用語が現れ、菩薩や大乗の実践者たちが、「誓願」という真実を語ることで、たとえば死者がよみがえったり、身体の損傷がたちまち消滅するという呪術的な効果を生み出している。

加持という言葉は大乗仏教や密教において重要である。とくに密教では儀礼に不可欠な要素にもなる。ほとんどの密教儀礼は「加持」をその一部に含み、とくに日本密教では「加持祈禱」という言葉にもあるように、密教儀礼の代名詞のような位置を占めている。

かつて、僧団のマージナルなところで、比丘らがこっそり唱え、僧団からは黙認されていたような呪術が、密教の教理や実践の中心に位置するようになったのである。

4.3　大乗仏教の根底にあるのは「空の思想」である。この「空の思想」を説く代表的な経典が般若経典である。「八千頌」「二万五千頌」「十万頌」からなる各般若経典や、『金剛般若経』、さらに、日本仏教でもっとも親しまれている『般若心経』などは、その代表的なものである。

般若経の空の思想と密接に関わるのは、仏身論である。そこでは、歴史上の釈迦や、他の仏国土の阿弥陀のような、身体をもった仏たちよりも、仏教の根本的な真理そのものの方がより重要であるという立場を鮮明に打ち出す。色身や応身に対する法身の優位である。そして、仏教の真理は経典という形で、われわれの前に姿を現す。舎利とは一般に釈迦などの仏の遺骨をさすが、般若経やその流れを汲む経典では、「法身舎利」という語を用いて、真理を説く経典すなわちテキストを信仰の対象とした。

さらに般若経典に共通する特徴として、経典を受持し、読誦し、書写することを、経典内部でくりかえし説くことがあげられる。経典を手にする者たちは、単にその文章を読んで内容を理解するだけではなく、声に出して読み上げ、手を動かして書写することが要求されているのである。このような読誦と書写のくりかえしは、人々の記憶に経典の言葉そのものを定着させ、つぎつぎと写本すなわちコピーを生み出していくことになる。般若経典には、自己複製を無限にくりかえし、増殖するようなプログラムが、その内部にあらかじめ組み込まれているのである。

経典の読誦は、それにふさわしい空間と時間を必要とする。また、読誦に適した節回しや、読誦する役割分担も生み出したはずである。それによって、特定の効果が期待されるようになると、その総体は儀礼と化す。経典の筆写についても同様である。個々の人間による書写は、単なるコピーの制作にすぎないが、きまった方法で集団で筆写し、しかも、その結果、何らかの果報や効果が期待されるとすれば、筆写という行為も儀式へと昇格することになる。

密教儀礼の中には、灌頂を行うためにマンダラを地面に描き、その四方に特定の大乗経典を安置することを述べたものがある。筆写された経典は、そのものが宗教的な力を持ち、儀礼空間を構成する重要な要素のひとつとなっているのである。あるいは、書写された経典に対して、ちょうど仏像に魂を入れるように、完成のための入魂の儀式を行うことがある。儀礼にとってのテキストとは、単なる文字情報の集まりではなく、儀礼の装置や儀礼の対象にもなるのである。

4.4　密教の文献は、そのほとんどが儀礼と何らかの関わりを持つ。経典そのものにマンダラの制作方法や灌頂などの儀礼に関する記述が多く含まれる。これらは独立した内容を持ち、本来は儀礼の手引き、すなわち儀軌として存在したものが、経典に組み込まれるケースも多かったと思われるが、密教の経典はそのよう

な情報をも「仏説」とすることに躊躇しなかった。経典の儀軌化が強力に推し進められたのである。

根本経典に組み込めなければ、釈タントラや続タントラという付随的な経典という形を借りる場合もある。経典としての権威を与えなくても、注釈書や儀軌のままでもよかった。歴史上あるいは伝説上の人物に仮託された注釈書や儀軌も数多くある。これらの出現によって、流派の成立や分裂が生じることもある。儀礼のテキストを軸に密教の歴史は推移していったのである。

もちろん、その背景にあるのは、仏教のテキストの流れだけではなく、ヴェーダ以来、絶えることのなかった儀礼文献重視の伝統や、同時代のヒンドゥー教に見られる、プラーナなどの聖典の儀軌化も視野に入れなければならない。儀礼文献が宗教の中核を形成するのは、インドにおいてはむしろ一般的な現象なのである。

4.5 密教の経典、儀軌、注釈書のいずれにおいても、儀礼に関する記述は、きわめて実際的である。阿闍梨や導師のような儀礼の行為者が行うべき所作が、淡々と述べられていくのが一般的である。神話や伝承のような要素はほとんど含まれないし、儀礼の効果や果報にも言及することはない。息災、増益、敬愛、調伏のような明確な目的をもつ密教儀礼も多いが、儀礼のテキストの中で、特定の儀礼の要素と結びつけて、それをあらためて定義しなおすことはない。

実際的なマニュアルである密教の儀礼文献には、当然のことながら、しばしば儀礼行為者の発する言葉が示される。ヴェーダ文献であればサンヒターとして独立させるところであるが、密教では実際の儀礼の手引き書という性格にふさわしく、儀礼の説明の一部に組み込まれている。そのため、冗長なくりかえしであっても、煩瑣をいとわず、全文が提示されていることも多い。

このような儀礼の中の言葉は、原則として、文献の記述どおりに発しなければならない。儀礼の場で阿闍梨などが即興で作るようなことは認められないのである。しかもそれは多くの場合、複数の文献に共通して登場する。つまり、文献作者のオリジナルではなく、引用なのである。文献の作者であろうとも、基本的には儀礼の言葉に改変を加える資格はない。

密教儀礼の中の言葉を、形式から分類すると、マントラ、偈頌、散文の三種に分けられる。このうち、マントラは真言であり、もっとも密教儀礼にふさわしい言葉のように見えるが、マントラを中心に儀礼が組み立てられるのは、インドではむしろヴェーダ以来の正統的な方法である。マントラはチベット、中国、日本などに密教が伝わる際にも、翻訳されずにそのまま「音」として伝えられた。インド内部においても、正規のサンスクリットだけではなく、土着的な言葉や、意味不明の音の連続であったりする。意味よりも音や響きが儀礼において重視される。

これに対し、偈頌（韻文）や散文は、内容が理解されることが求められる。重要な経典や論書などから引用されたものも多い。おそらく、阿闍梨をはじめ儀礼に参与する者たちには、耳になじんだ定型句であったであろう。儀礼とはこのような引用でできた一種の織物のようなものである。決められたパターンの柄を織り上げるときに必要なのは、パターンを崩すような変化ではなく、いかに柄を美しく見せるかという演出方法であろう。それに相当するのが阿闍梨の所作の見事さ、唱えられる言葉の格調の高さ、儀式に用いられる調度や道具の豪華さ等々である。その中において、儀礼の言葉は、いわば織物のたて糸で、つねにテキストに一言一句たがわず、正確に発音されなければならない。それもまた、体系化されたヴェーダの祭式以来、インドの宗教儀礼の一貫とした伝統であった。

5 以上、雑駁ながら、インドの宗教儀礼と文献についていくつかの事例を挙げてきた。これらに共通してみられるのは、インドの宗教が儀礼を中心にすえていること、宗教儀礼のテキストがシステムをもっていること、そのテキストが儀礼のあり方をいろいろなレベルで規定していること、儀礼は力を持ち、その力はテキスト（言葉）によって保証されていることなどである。

ここでは取り上げられなかったが、多くの儀礼のテキストが文字によって表されなかったことも最後に指摘しておこう。ヴェーダをはじめとするインドの宗教文献は、文字の使用が一般化されても、あえて筆写されず、口承で伝えられた。本来、儀礼のテキストとは音であって、文字ではないのである。儀礼の言葉はつねに秘儀性を持ち、それゆえ、視覚によって広く共有されるべきではないとも考えられたのであろう。ただし、文字によって表されなかったのは儀礼テキストに限らず、初期の仏典なども同様である。この点については口承文学の視点からの考察も必要であろう。

文　献

井狩彌介　1989 「ヴェーダ祭式の思考と世界観」『岩波講座東洋思想 7　インド思想 3 』岩波書店、pp. 23–38.
井狩彌介　2001 「ヴェーダ祭式の祭火とその象徴思考について」頼富本宏編『聖なるものの形と場』（国際日本文化研究センター 国際シンポジウム 18）pp. 303–316.
永ノ尾信悟　1989 「ブラーフマナ文献に見られる思考法」『岩波講座東洋思想 7　インド思想 3 』岩波書店、pp. 4–22.
黒田泰司　1989 「祭事哲学の大系（ミーマーンサー）」『岩波講座東洋思想 6　インド思想 2 』岩波書店、pp. 3–25.
後藤敏文　2007 「古代インドの祭式概観―形式・構成・原理」『総合人間学叢書』3: 57–102.
奈良康明　1973 「真実語について」『日本仏教学会年報』38: 19–38.
藤井正人　2007 「第二章 ヴェーダ時代の宗教・政治・社会」『世界歴史大系 南アジア史 1 ―先史・古代』山川出版社.
Tachikawa, Musashi.　1983　A Hindu Worship Service in Sixteen Steps, Shoḍaśa-upacārapūjā. *Bulletin of the National Museum of Ethnology* (Osaka) 8(1): 104–186.